



近代前期に日本に渡った韓国女性の足跡を探して



徐 智瑛
(ブリティッシュコロンビア大学)

私は2011年12月7日から21日までの15日間、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターにおいて、短期研究プログラムに参加した。私の研究テーマは「近代前期（1900年代～1945年）に日本に渡った韓国女性労働者について」である。

近代以前、ほとんどの文明社会において、伝統的に女性は人目につかない家庭の領域にとどまっていた。韓国の場合、強い儒教思想と家父長制度の下、女性は日常的に独りで自由に外出することを許されず、特に上流階級の女性は自由な外出ができなかったと言われている。一方、20世紀初頭の韓国では、女性が故郷や家族を離れ、新たな生活を求めて大都市への移動を始めていた。

女性たちが都市部に移り住んだのには二つのパターンがある。一つは教育のため、もう一つは労働のためである。私が関心を持っているのは、恵まれない階級から、仕事や新たな生き方を求めて都市に移り住んだ女性たちのことである。こうした女性たちは、伝統的な女性の生き方、あるいはへき地の厳しい貧困からの脱却を試みたのである。西洋の近代性が、へき地の恵まれない階級の女性たちにどのように浸透していったのか、私はそこに注目した。

植民地時代の韓国で、女性の人口の約4%が仕事を求めて農村部から都市部へ移り住んだと言われている。その時代に都市に移り住んだ女性の数はそれほど多くはないが、割合でいえばそれは決して小さくはない。なぜなら教育目的で都市部に移り住んだのは韓国の女性人口の1%未満であったからである。さらに、移住した女性の中には、日本や中国などの外国に移り住んだ人たちもいた。当時の韓国は植民地ではあったとはいえ、恵まれない階級の女性たちは、資本を追って、あるいは新たな生活を求めて、国境を越えるという危険を冒したのである。

植民地時代に仕事を求めて日本に渡った女性たちは、主に紡績工場などの工場労働者になったか、レストランのエンターテイナー、またはカフェやバーのウエートレスになったことが知られている。しかし、当時の日本に渡った韓国女性の歴史的足跡をたどるのは容易なことではない。そもそも女性労働者に関する明確な公式記録が

ないのである。神奈川大学に滞在している間に、私は1900年代から1945年に作成された韓国人移民に関する主要な資料を探し求めた。見つかった公式文書からは、韓国から日本に渡った移民の数、日本への移住の行程、韓国人労働者の日本における分布、韓国人移民の生活および労働環境、地域ごと（東京、神戸、大阪、京都など）の韓国人移民の労働および社会的・政治的活動の記録、伝記による韓国人移民史などの情報が得られた。

韓国女性労働者の手掛かりが含まれた資料もいくつかはあるが、近代前期の日本における韓国女性に関しては散発的な記録がわずかに残るだけである。私にできる唯一の方法は、さまざまな資料に散在する断片的な痕跡をつなぎ合わせて、こうした女性たちの歴史的な位置付けを発見することだ。歴史を再構築するのは本当に大変な作業である。歴史に埋もれたこれら多くの女性たちは、歴史的プロセスを経験してきた時代の証人でありながら、何も語らず存在が目に見えないのでなおさらだ。さらに彼女たちは自身の人生の主体者であったはずだが、その存在は隅に追いやられ、権力あるいは中央の観点からは無視されてきたのである。

私のリサーチは、歴史の周辺に追いやられた「他者」を追跡する試みの一つである。神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターで個人プロジェクトを遂行し、私は貴重な時間を過ごすことができた。このプロジェクトに際し、物心両面で全面的なサポートをしてくださった同センターの先生、スタッフ、チューターの皆様に心よりお礼を申し上げます。

英語、中国語でいただいた招聘レポートは、事務局で日本語に翻訳させていただきました。